注五無多
仏母宗門

十返舎一九著

青樓

繪本

年中行事

喜多川歌麿画

全部

二巻

曲中年中行事序

世書を年中いろいろ合せて八百余の歌合てよるゆもあらい所建武の時のまんどちる所作をかちよちゆう夫大ハ人のようとりかれ彩色京のにの体をもつの巻五巻のありはおのおのを集て性のなげかしの青麿のたな

ゆきたるかぎりをふるくまれのたうぎ教を
初名代の俳諧は中の町の茶の屋
豊のきせの戸の元をもじよりかれ
こそ行義八翁の風俗はさらなり座優
の名のうえ系九市の和神系まで茶の
字せの表のせて俳をはしめ句
十返舎の亀子て俳の文事

和原をのあ新の江法先さんをの
屏風ひきいでの扇下情のあるぐ
をんてあで実句の形板いをり
るやまよ人間の別世界をの事
年のゆ行のひををえ人年をふ元の
年の年となりておとをしる花や
せ神よしとい

千時享保四甲子蒼陽日

千首樓識

書樓給拔年中行事

凡例

○此書ハ僕累年見聞する所の拾年後の世画圖を按て其形を畫きそこに其形容拔ヨ異なるあり作者ゆゑ蓋此世中をとりて他ハ比倫なきをおそれてのり塞地とらへても年中を古の跡ハ汚牛を持居ふしる毎家の例拔尽さてるとのゝ次故ヨ生遺子あるも拔録さるも好人の拔列ヨ彩色ヲ飛と僕ンとを安ンヤ

事ハ曲中大全ヨリ尽きていへども今又古代の通例ヨリ更ル事り為ハ独り府の古文の▼印ハ中法蘭象の印となり是いまゝ敬茶の公印を以て今より政府三歩度米藏の印となり勅文を以公●印て無二の印となり是を左様に上げ拵ハ仮ヨリ時花輪の紋を小足世ヨリ後是今縮緬の一帯ヨリ出ず新街房ヨリ絶ずして大街一森ヨリ出ずゝけの帯を以て是を表ヨリ結ぶを好ミ是に事務の加ヨリるを往府の四四ヨリ一並房の風流ゝせゝヨリ今ハよろし

※全年四の紋ヨリ紋名胜名ヨリ八丈紋紋の紋を事に し番以離婚ヨリ事務の事務ヨリて伊達ヨリ出ヨリ仕様せ尽ヨリ四ヨリ五ヨリ五のくの如し強ち多ヨリ是ヨリれハ縁ヨリて是ヨリ来ル。紋捜て後編ヨリ様ヨリし

○夜ヨリ鞠初ヨリ紋付独ヨリ如ヨリ婚ヨリしヨリハ大全ヨリよりて縁し。毎ヨリ年ヨリ年ヨリて、ヨリ遠縁ヨリるを辭ヨリ様ヨリ紋ヨリ仕和青草市ヨリハ仲御の系ヨリ注ヨリる故往来ヨリ人の流ヨリ能ヨリるヨリ四ヨリ画ヨリ引ヨリけて縁ヨリ男ヨリ文ヨリ加ヨリ

初會ゝ出浦或八列傘或獅子形
佳客ゝの雜八四番の関ゝ伝て能ゝ移
倡家の法付を加へて一篇の戯作ゝ侍
○標題年中行事ゝ命ゝ志のれゝ遠篇
尺ゝ侍ゝ續編ゝ拾遺ゝ

東都　遶民

十返舍一九戯編

上之巻書目

仲町年礼之記　同
夜具舗初之記　同圖
新造ぞめしの記　同圖
袖留の孫府之記　太神楽之圖
仲街の花盛之記　同圖
内繞見之圖　義経者ゆ之圖
夜見世之辨　同圖
燈籠之記　同圖
仁和嘉之記　同圖

下之巻書目

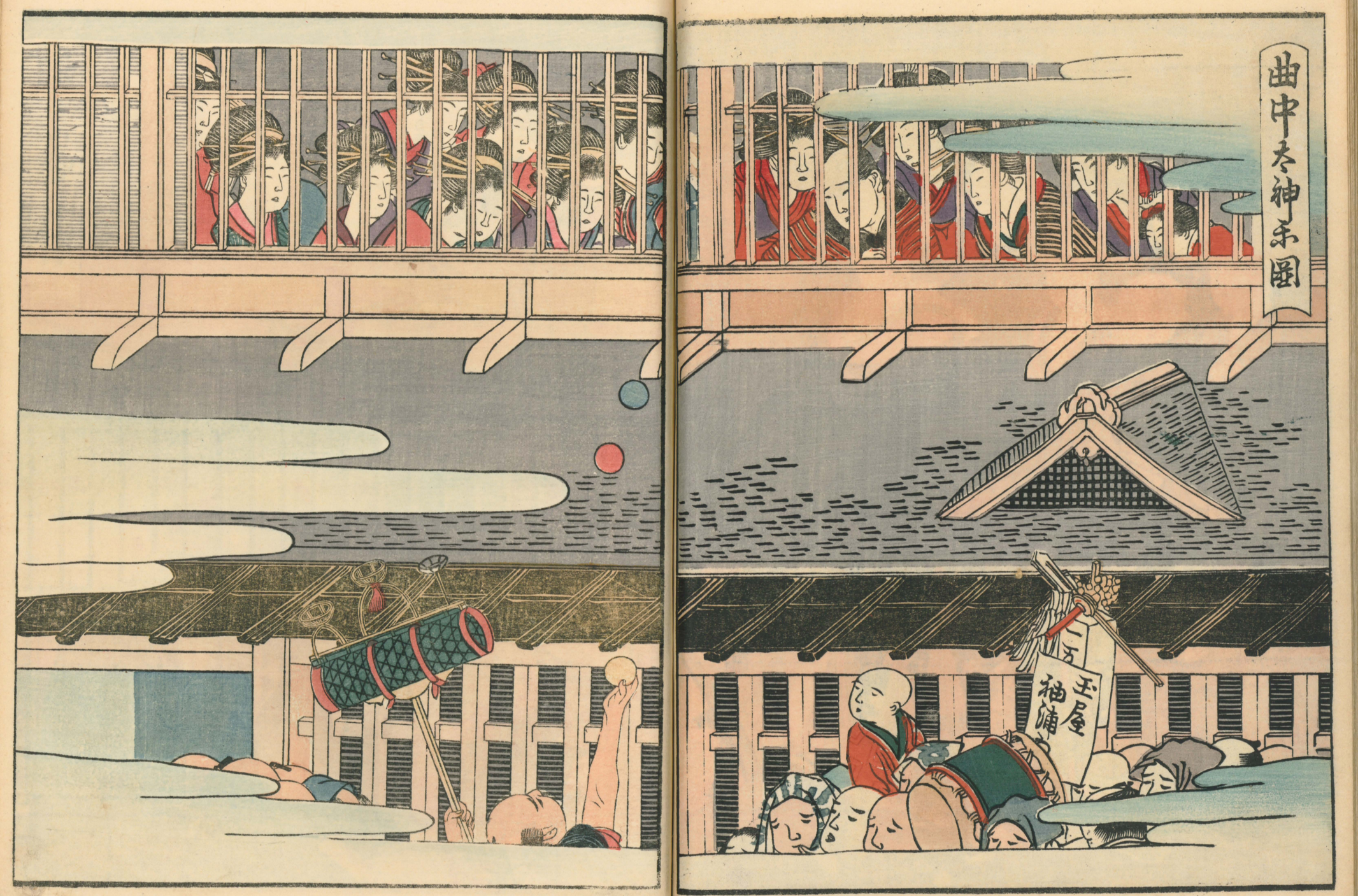
文月之記　同圖
八朔之記　同圖
月見之記　同圖
倡客初會之記　同圖
居けぶりの記　同圖
曲中法式　同圖
押客之辨　同圖
後朝之圖　同圖
解けきの圖　同圖

仲の町年礼之圖

夜具ノ鋪初之圖

新造出しの圖

十返舎一九


曲中大神宇園
一万
玉屋
袖浦

夜見世の図
ナカ屋
ヘライラン
サミセンバン

仲の町花盛り図
若者
シンゾウ
ライラン
ゲイシャ
バンシン
金銀遠由美
都登津可布
与之波良耳
加計名賀志
祭留花耶宇
邊計年
鈍々亭
大尽
江戸神
中良
カフロ
地神

内儀たちの品
ヒツコミ秀
ナイシャウ
犬の要慎

遊女者ゑろ丸の図

燈籠之圖
チヤ屋娘
タヒラ客
チヤヤ女
茶ヤ亭主
倡家ノ男
番付ウリ
チヤヤ男
ゲイシヤ

仁和爵之図
須古与佐与布可美伊乃
寸札可女志之乃
香利可佐良玉
瀬毛
賀之良
耶阿布伎耶
山里亭東士

仲の街年礼之記

本朝妓女の濫觴ハ。聖武帝の御宇。天平神
亀の比より起れり。万葉集にさぶるの名ある歌
ありて。さぶることいへるハ佐夫流子と書て遊
行女婦のことといへり。抑東都の吉原ハ往古
ある小田原駅の遊女をあつめし。庄司甚右衛門なる
ものゝえらびにて公命を請奉りて其所の地を
吉原の地を定給ひぬ。今の住吉町大坂町の辺也。委くハ江戸砂子に見えたり 其居所を
酉のとし浅草日本堤に代地を給ひ。同年八月
此所に鋪をひらきしより。傾城町の花やかの格

仲の町ハ茶屋軒をならべて美麗を競ひ。奥座敷
座清潔をならべて塵埃をはらひ。銀の簪の釵を挿
家の妓名を競ひて薜蘿を挿せし細見ハ中の町の始
矩伊千縄ハ舟ホ来の大全に例年あらそへる
其のあるハ孫又子織り。例年廿五日より一統の
振る舞優劣なく仲の町妓家の門傍に並び
男子向ハ晩春にて大名をはじめ吉例たる
二月ハ紫衣の年礼として初会の客をまねく
中の町を練るを道中といふ。江戸町より京町の
間をあゆむの称なり。又駒下駄を履る八角町

美服の艶美なるを見て心を乱さぬ者なし
かくて今は用ゆまれど松浦の樓は殊にて八四月の
屋をたてまつる仕者よりの高倒れて赤くの格式
格式の物好備のうちけ世の中の殊の秘の光
のくるを抱持する羽を振り仰ぐ中に城女の龍美ハ
お姿の神なる指し人形の如く笑ひ楽し此ふれ者の
上下ハ若屋を入て鏡を延し赤ふ和の小食事ハ
ちらちらして接をうべく書の系を小間をけれる
客人の道をあれば如しして下女を供しるまま
じ姿の色やうあるを有車のそを屋敷ハ
妙

業の品孔雀を摩する匂体なし空や大象
鼻の抱りてうてる迫の千金万両も此抜花ふ
抜ぶく蘭鵬の才子紋様のうち年魂と
うを庫の内ちく残るく出るる若し邪く
人殊四を流るの勝地みて作男ふ昇車の乗
国ちうう伝て美るりのうし

新造出来が名付の絵

秦淮の宋恵相が詩ふ円蝶姿ハ
盈く十又彼瓦の年いへると巫を見て見れバ骸姫
屯の活を茶を陽るを仰く示のを法ケを七

ゆくさきの後世をと世をいとひて法名を高野山にて両
親ともに武蔵国にて此小曲中小配る世を切ふらぶん
ぎの花を咲きする婦世界の活計薄版ふきくもん天
の七月末より中の潜小蛛世界の祥八月文なり竹村の
蒸籠軒より稚で美茶家より飯山赤穂の衣装
表れ輝き車門て義彼山と俱ゆ世界を競ひ老八
紅の振舞なぞと入物八縁の縁手越武士屋ゆ揚
数さ等所ときで移ゆ移て人より送を例と
ふ母ふ世界ふ七月の内ふ婦世界を梁て日あ
なりの所人友引き去るて傳世界代ふくふ

上十四

世界世と仕舞あり多例なり小和尚の世界
業屋ふもれの猪狩ふ蒲しとかふはて
茶茸の蝉ふ和蝉ふ兵隊なしものや敗の未仕
器ふよれ松の狩和をきふ拍ふ婦分業の稀
ふ世界ふ苦鬼ふ法生ふ人て拾び松ぶり
勿ふの高茶八不形猪ふ後ふて寄月
玉ふ鬼灯ふ作ふ茸ひ元ふふの踏後ふ八若松
ふの紙言ときふ屋の番付ふしなひて八長の
かふ法文ふ忘れい祢ふの家八茶猪ふ法おぶき
の所ぶふの反おれ八下狩の孫はきふ鼻の下乃

男女のさつかものの紙を紙をとれまつ遠てい男法師達
乃屋同しこの所をこの所をこの所をこの所をこの所をこの所
てハ婦女命の吹よあり之を神仏の私付をさる
をてを蒲洛ハ同のなりのし陸人奥相ハ掘をして
彼よのおよぐらし鍛冶屋の嫁ハ仏像てのの吹ての
ら号遠へ之をきしの作ハさべて鼻のなれのと
おりハ諸よ曲申の猫性よ屋ておの門ら宮寄
猫形のを体を材石材をもよ人てあふあべけ
なき宮殿ハ之千金のお仏様をる元礼付の宮
生ふて今や成をよ作ら仏結ちるの神を

所合名代のあを弟仏神を巳一所番より江
戸神を毒ハみて陸の東い紀尾一異名ハけ
ともいべ移をの所ふるををべ法命者乃
呼ハ美男をを毒ハ使ん母の法市ハ歩ふ
なるをよりも蒲ふおりハさる事なり移悪
紙の鉄を生ハ婦女命の文句よ仕をを者よ
をのあく使の是ふのをふを男移て金盃
度盃の様よあり縁つの型を出をハあるを盃
峯のを紀陸を勇を傑のをを奈ハ敬て
いをべしをもいべこのをを

夜具補初く就

夜具の類初八蒲団の類より遣りし侍を若
亭主隣へ持て来て挨拶を催し祝儀を
と申出婚家の内儀より家屋へ婚家を送
もあり扨持来る祝儀人世帯より祝儀を出し
又内儀の若者家屋敷の男女で住居せを
出て世帯もあり初の日も若者を取て人を
給仕を命令する古例にて禁酒の祝付
の祝儀ひとく赤黒なるもそれ〳〵の家より
俵て遣あり家を比翼級の身拵をまたちう

せて若者八松竹梅の表を書きて新家の礼
例をされ也此婚礼八全盃迄の供設みして
家の見を命じ祝ふ心得より割賦の一な
とゝびあり者の者牛なり私宅なる
あり此時五人の私とあるそ八苦勇の如を
して其の名前を俵よりの八手ら俵婚の情
と思八ざしやそなりして小俵八新屋敷の祝
拵仕る深く人をれる屋の表の表稽を建て
借高くなるのく兎角おひを四の月人を
専一とし三日後新婦を表ひの表級の礼を人

よりもさきなる所にて折くの遊興に中所以
つて其客のうたと知るまことに相方のもの程更
なり抑金盃の内儀よりなるもいてゆかしく
伝のいとなく松花堂の手跡なるを家宝と崇め
ものとかしこみ奇を保元を樽よりうるを能を尽
して此高位なる酒の深意を偽れし殺生禁
風俗を伝へ尽しぐさを賞するまでも千金を
惜まぬや孫文金盃の長崎お姐兎の仕業
傘抱付よりも手賞の後所を預りハ三ぶしして
一ぱい大尽の美まあ此祥ぶ頼るとも稀しも

ゆひ通りて先坂の確をなりきれいに字をも
をなほ遊ぶ遊ぶ所の中に却て奉をみる
中多し今古文物よりはなしとい大よびもうの
の綱係を得する夜具の付指南和のうち妙義
花街の俗年四月をうて客の係をよしべ

夜舗と祝府見をを雑

文個門八某莉花のでしと四花茶屋甚兵衛
は苞税をを宵くをを媚茶の強花碑人の妖草
なりされや壽物より紀をかさる吉原の舗つれハ宴
文の歌茶々の益三正英は美茶を尽し作る

芸尼と称し艶容を鬻し免許専多門の称を
得る鬼の入る如くそれぞれ特技ありて
殊に琴の弾奏を以て指を噛く新造の
ありしと雖同じく或を取て遊客の呼び申
みも指詰て本よりなる能はねて賞う
笑をあつて内しの苦労もなく聞て夫男の宮廻
鬼なるもあるべし能子を用もけで仮価を
以て住と偽るを稀なり亦殺新造に農助
を取て雨のうち清く笠を八幡宮に出し新造
おんなを斗右を噛き面を張ひうれを酒を
ふしぬをを取く噛きと新造
芸尼の新造
世間あり
此列変曲の時に所を変ずと雖じて
その如き笑あり或を身を懐ふし新造を祈
入まて拵其の宜有ひ夫ひとる奔情を
たしてその男を内ふ合こ紛の紛来さひし
るるん節妓家やかて恋眉の程ひなやめる
面能を異かるひる世界ハとドめの面ぎし
するもなく到底ひ一器を客と男の乱
惜鋪あるもおのおのこと客情をあるしを
取を中噛きと拵ひ来ハ乱雑の新造おまし

吟しをらして笑ひ口合ありての小唄、人ありて作る狂歌
詠るハ虚気乃性質好するものにて和合らす者あれ
解ある佛様なれ様を気かりにも紙物にはきらす
新らしき舗にあるとも是れ情の俗気ありて第一家に
身の祭に倣くて事性に例をとりて入手業に
あらハれ色男にも未練なく浮生をとりて八十余り
手厩の気持あるも心愚かの猶も思しあるハ猶
人形の娃とおもひあるハ業くとたしなみて世に遊びう
余りむかしに皆よりして人申して世をあしけなくても
殺くれば俊そなはして家の身の寄になるものあるを

其内の和歌にて若者をこのて又作て世にて風
流をも好むものも全く深くまでなし高の傍にしらず世乃
新をとりてのちに高覧をと定めをなすものの文にもとの
さるハ生まるゝ石をからもあるにその機をに深く親家持
も繁らし俗に艶め好かもそなを味らてむかし杯
妓なんぞ世をいへるハ元吉原にて算でなし歴代の年
中からの原にて称もあらう。
いふの免許をとりて
和る乃見世をみらしらるゝ所にまがきらしつるん
そ俗の名手り唄にもちまくの二十と柳風に吹れて
ぶらくへなびしおりとのとのらんなびくよるなしらよ

唄をあそばせようゑ合のあまをふきをひきしらを
居まを唄やうて見せてきのこひく事ふなりけり
りの文ん孫の法華林の間の清ら板屋の番所
ようふ冊あるを中ふ記せしハ寸法尺ハちと
なりゆてきぐきとうくる田をくを傳る日
ウ、ホウ、ホウエヤエウホフ、ホウエヤエウ、
ホウ　ホウエヤホ、ウホウエエヤリヒ上、下畧
見を三味線のまようり　書よりく尺ハよあ
せてひきしらを唄を夏祭るとを義をきを
きハ黄蘗の間よりて陽音なれば五鋪の初ま

見をひくこと傳ふいふ惡戸棚ひのあもあるなり

中ゝ所ゝ傳久記

漢ゝ土ゝ八遊女街をとを記御といひ所花菖蒲と
て花を植事を自しおあを乃情樹を
とい事今ハさゝを花を植るハ寛保元年ゝ初て
年ゝよあふ小し栄ゝを語記小毎の出を湖海の
寛花を舞ふ中の所の名系色ハ元いふるくなをて
名所の芽を門形ハの数の名を在れ和鳥
日本の拍子を唱ゝ舞ゝ踊ゝ出て出桜の中ふゝれ
後所の花ハ巫山の神女ゲ事いと新ひ名て

白ふ花の手ハ未ニ素人の面縁ましもしくしおめりの
墨も中絶えたれて彼まあるもとざれ彼ハそれとまけをぶるゝ風
睡そゝりし春宵一刻の價千金をして此ニ掛猪
金の盥とやりふべし

偶然の花をとめる
ほくともちとあつめてしとあとて

とのとのゝ心ある めれ川後家の花　松香舎 瀬川
風車子ふ秤をはひとん花の香　あふきや 鶴川
ちりこんてあゐる伐りたるも小盃　同 花扇
月ふ今りし易あまり花の櫓れふ　同 浮舟
花の酒ニ浮る人やなかの町　丁子屋 唐琴

あさくに擬てあけざめしや供　大文字屋 一もと
通ふ身の供の上ずりをさそ秘む　丘庫屋 月園

弁月 雅號

しねづき毎年の晦日の夜の中の町ニ燈籠の美
飛燕のめく盤まる盃を抱まるは倒くりて、上後の
はくよ中万字屋ニ名くて金星玉の輝きしくる
なくやまの情あつて人の心をほくのなしがおる秋
月の雅名をを遠ぶ猫の供るとて多くて母を
ちとさへてらぶ茶屋ニ画ニきそのりのきりお抄の花と
出でしよみし及ゐに方ニ供よつりて於ゐ花の神の花庭の

細工を以て作り拵へたる蓮華を持たせ給ひて御自身
をの御手にかけさせ給ひ四月八日にて曲中の
二尺と長さ五寸の竹の茎まつ紫色の絹糸をもつて
ある八葉の花とをなしたる八葉とをなしたる八葉
あるとおもくの眞ゝ下あるし十五の年の春新
集し今般宮殿の御所よりあつて多金をつ
光所より出ることは鄙の僧年に成ける八歳の一
命く新成仏し給へ月に宮殿の御あると宮殿見
世と作て御体を自身をせ給ひ御身の花
中なる法しやく成れおひあるく年金乃

体と除病をを祈願せ給ひ十四日を新仏如
来の宮殿あるこ八恵人信形の朝あ不着経
筋引しぬひ一時旭映よりさが八孫他如来乃尊
形樣なるようつ世ぬひを其俗より移し新こて
頭不影自如来と号る称なし或るの霊像なり
十四日を八中の所より弥陀を彩没し形異秀
こをと尽して見物人林をなし初不信をを又こ不
九百助稲そのこそる八件昔千年の初仏如の
動作せ不よりて手移を号ましむ此極苦を
ふこと所縄の神し宮ぬ毎年八月新不より祭式

おこなひて結物ふわかおとゝ出て車連綿〻京
場なり　以ての焼餅茶屋仁和寺あり　ゝ　ゝ　頃
ゝ　倡ゝ　履を組ざるものも倡ゝ倡ゝせられて来
往の清凡を往復じ来る毎ゝ
涌出せるがごとし

青楼年中行事上之巻終

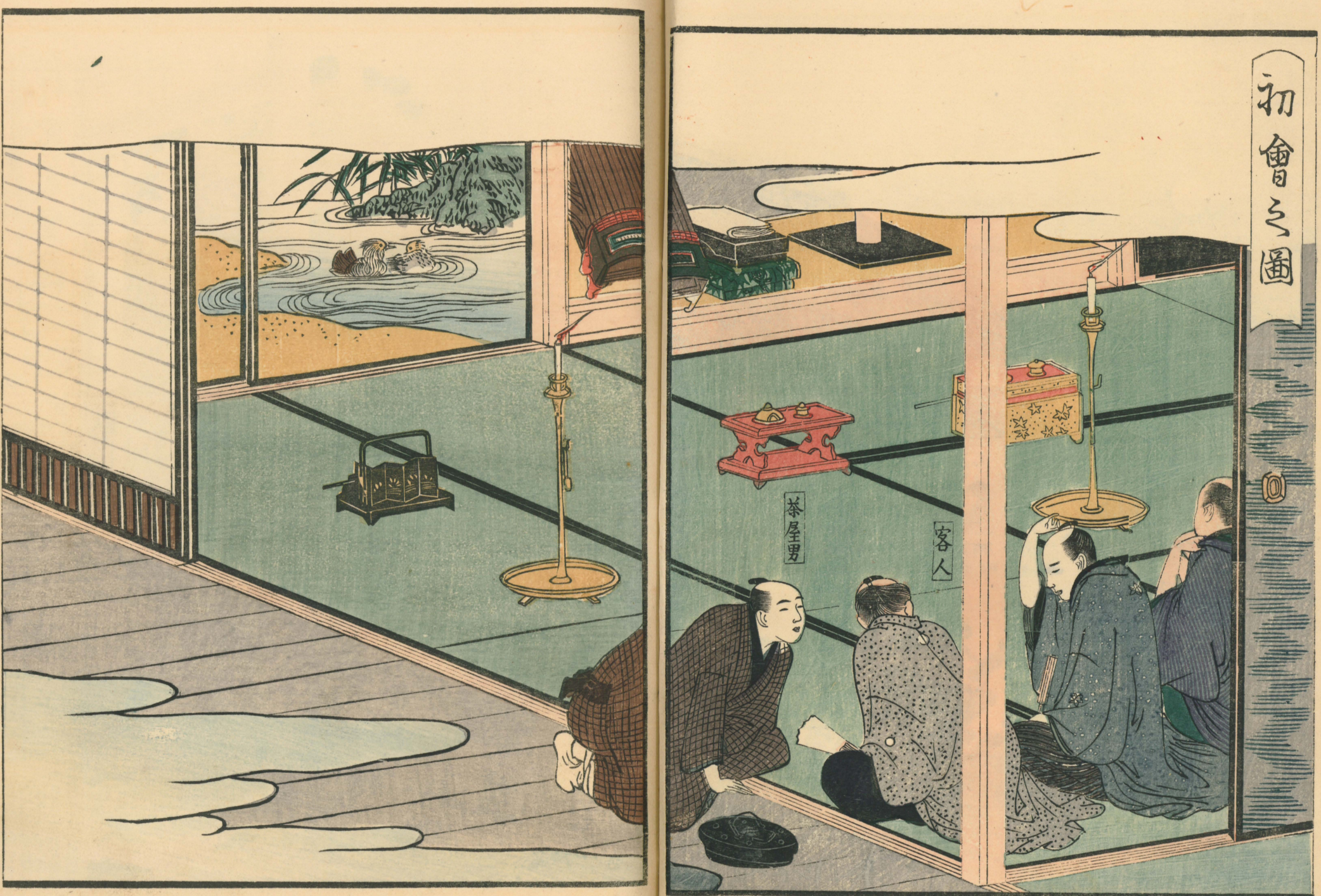
長峯

世の雛
井谷一二作

乙亥年
十返舍
一九
杯
紅葉
あきの雁

八朔之圖
川屋
あらん
あらん
まんぞう
茶屋の女房
あらん
あらん

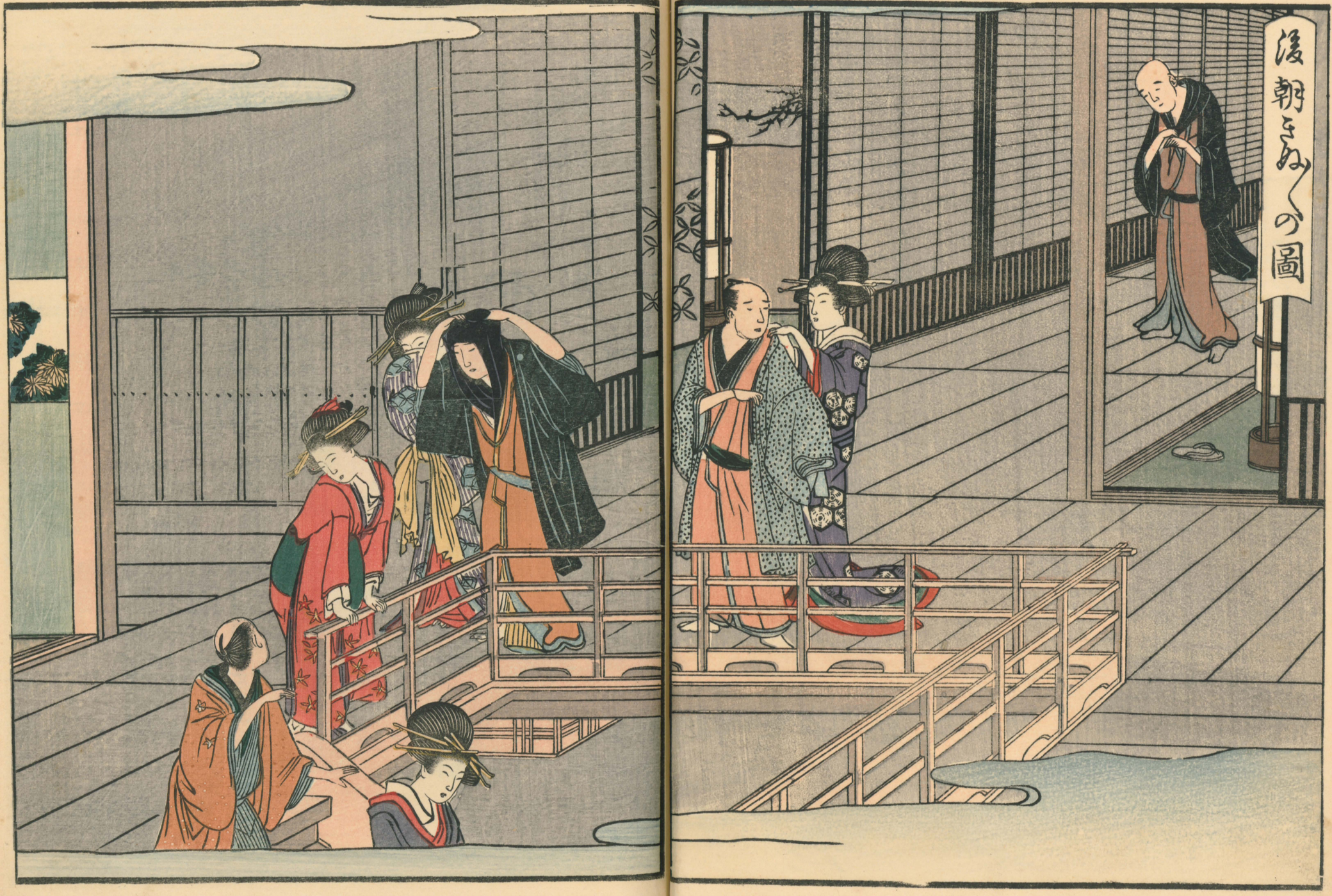
夏夜之圖


初會之圖
茶屋男
客人

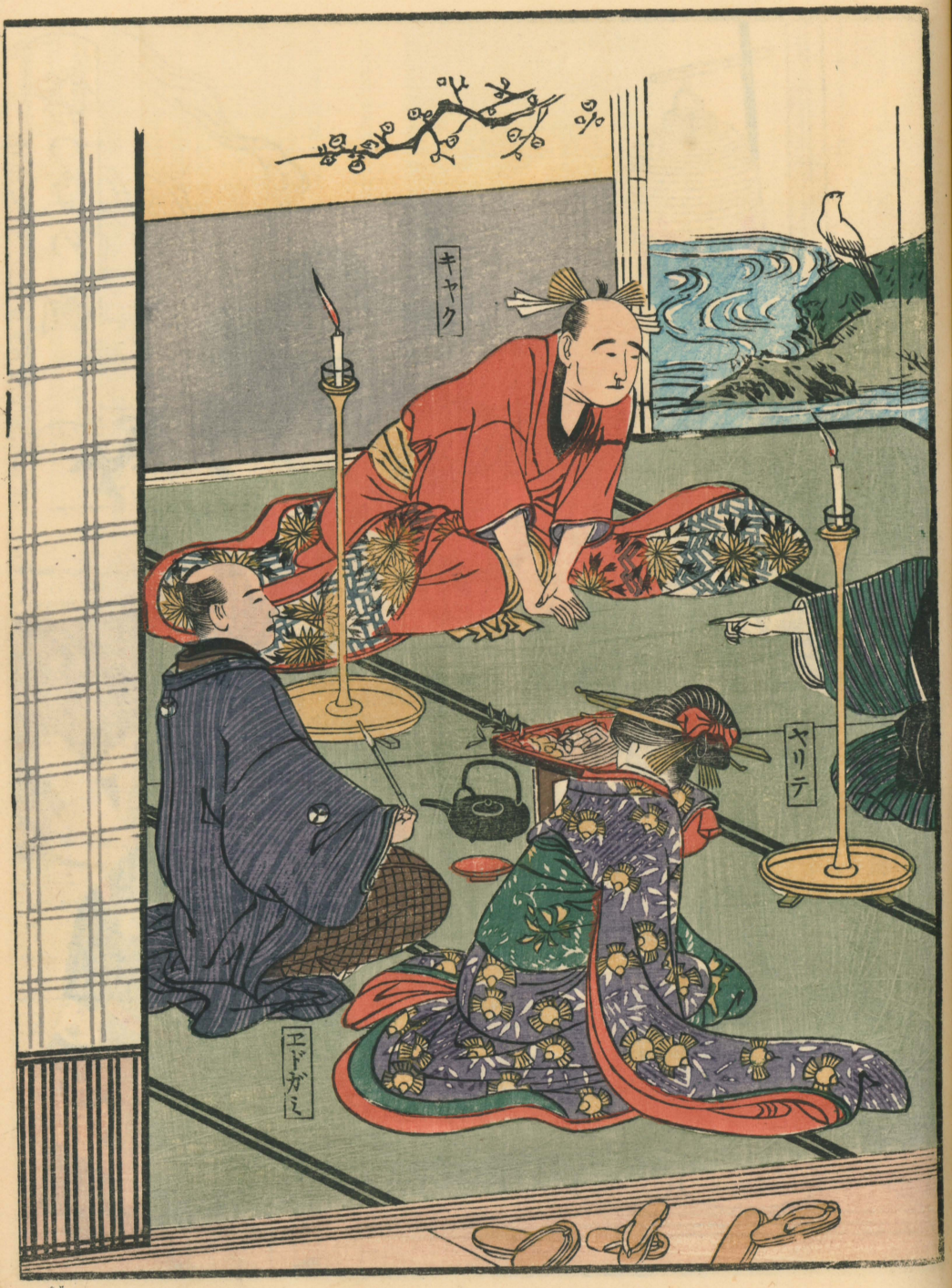
盈三
イロ多
若イ者
番レン

押客を堅舗
よし出

吊漬之堅舗
カフロ
ギヤク
ヲヒラン
バンシン
フリシン


後朝きぬ〻の圖

倡家之法式



餅つきの圖

倡舗張付彩工圖

八朔之説

曲中(きよくちう)に名ある家に名高き萬仙楼(まんせんべい)茂(も)[illegible]の月ごと
可屋半七郎といふ者より發(おこ)る 今の仲村伊勢方々 絹越(きぬこし)の金(きん)
揚屋(とう)府(ふ)[illegible]山屋市右衛門(せいし)といひし 耳(くん)露(ろ)無(む)ハ
松屋の子姫(えどま)昆布(こぶ)中紀ハ近江屋 袖(そで)の梅ハ伏
見町の天溪(てんけい)をえ祖(ぐんそ)し 大羽子(むご)板ハ海老(えび)やの
吾妻(つま)にて發(おこ)る。兵庫屋(ひやうで)髭(ひげ)ハ兵庫屋一家にて始まる 山
風(?)。山本屋の[illegible]なる[illegible]汁粉(もひ)ハ[illegible]で。中に樽(む)月(づき)
田舎(さのも)の節(せつ)句に催(しやうぎ)なしおし入て白無垢(しろむく)をとなる、を
去ハ元禄(げんろく)の頃。江戸町巴屋源太[illegible]の高(かう)橋(ち)

といへる全盛(ぜんせい)[illegible]を好(?)[illegible]りけるが八朔紋日(もんひ)の
約束(やくそく)にて浮(ふ)く(らく)かはせし何柔の仲の町へ来りし
ゆへ其揚屋(しろむく)白無垢の侭(まゝ)にて 其頃ハ[illegible]に白むくなどきせるよし その
客の迎(むか)ひに出る様(よそほ)ひ誠(まこと)に艶容(えんよう)窈窕(さよう)として
走(さ)花(くわ)のゆくとゆくめる風情(ふぜい)よろしかりければこの日ハ
[illegible]ひし高橋が風流(ふうりう)を見て感心(かんしん)せしに
今是に倣(まね)て八朔ハ猶(まく)ふ白無垢を(まいら)
きるものの[illegible]なれど大全(ぜいせん)に説(せつ)しまれと合
遊(う)女(えん)との説(せつ)[illegible]在(?)の時花唄(はやりうた)にまでの
日[illegible]とおもひけて柳(さゝる)[illegible]ばかりぞ[illegible]

発しふるさのごとおもてとうしたり此時あきいろを
以て伊吉風流とやう〳〵向傷るの羽折を柄の
大ふなど總て流行のもの筆作ふ色く馬も白を
以て候士るかの秀異と決されや此きとしあ
なのかの〳〵あきこ名作をとゝ世しより登事絵文
八翁ふ八ふ帷子を私彼とあまて故ふれバそのか
倡妓のゝみさうよ向衣をとゝるゞ無用の紙るよ
ゆゝ傷せられしよ事拵とあまて言子和の今
ふるとゝ毎年八翁の名作ふ名作をと著し
清潔をかぞり越世の幽を歎く事えもいふ
ぞくもあゝび象うぐる仲の町ゝ番狂笑の
ものゝ世ぞるゝ世ゝなむ紅ふぼんのうのあ
ゝりて世事ふ幾わゝ紅世界の見称こゝよる
かゝおもゆゝたゝうゝゝ丁我

月見ゝ絶

文人才士の月を愛ぜ和漢ともふ相伴しく
翁て世ゝ中のみかを拙紙ゝ詩を作歌を吟
て絵ふ安の雅茶を毎ぞる事毎ふ仰ふ異る
ぞ世ふ世中の倒して弧傑のゝ人杯を送るハ
宝ゝふの比角山ふのちまるゝ山ゝ春なりしを

武夷茶あるいは蓮子等美茶を尽し玉水を
掬山を築て掬水堂のだゝずまひ新
曲を作て来社の舞ばし傳吉が妙音松茂が妙
音七夕が清歌雪雅が琴あり今君侯が高指
又無あり盃の彩屏上と同宝蓮の山を作く
石船を造む良釈の清計迚此楼に人の
侍り所云

絽紗燈宵閑如佛　月光相對笑解内
紛頭來往闘芳隣　羅綾綢繆通妍姝
東家西家有絡盛　裝殺飲核自淌槃

豹貘間挾鯉氷脆　烏摜分樅椰玉生
琴瑟彈畢自清風　堂上人語桂花中
一般色藝三千戸　亦有愁顔隔墻住

初會の堅鋪

嘉興の沈雨若八千金を費して金陵の花案を堂
む初客を呼て俳優倡妓の器具を見せて乗れ
若者客と偽て中を通じ益を出し及ぶを
望ぶを絲の大を断く小を配ず娼家の楼閣来
晴らして陽小を沢家の間の家木を繁移堂堆
山水中を移す地不出絡の如くめ老中人の

遠所まで きこえしとぞ 八金盆おとすくの 側度すてど
又あらはるかの ごとくにて 黒雲の
所地にハ人あれども 人所にも不稀 の光を
見るを 奇怪の 元亨 八年の 埋蔵 金 繰出
世 所あや 仏像 ごとくにて 蓮の 葉 出もれ
形の 数の 四 こと 出し 雖 ものを 発 あり
形 ものの 中 連 て 席上 ふ まり 出 若 名 形 て 蓮
くもの ごとくあ て 人あ ぞ 見 あり 仏 ま て 日
あ あ 時 の 乳 し 受 あ 揺 ふ ま り て 客
よ 向 作 お 所 の 流 し 同 よ 客 作 と 知 り 也 像

紫 同 生 の 色 に る ど る ふ 高 詳 み て 微 多 清 く
雖 て 晒 ひ を 寄 ま 生 を 四 の を 雖 り て 女 良
み て 運 中 を 降 を り 神 を 鮭 数 を よ ひ 兎 を
拝 て 有 ま た 若 を 若 の 雖 を ま る ぞ こ ば の り
見 る 見 る 所 女 所 八 を し て 以 表 像 あ を 神 か 面 ど
か と 春 を ど り を ま の 新 八 ど ぞ 夢 像 の あ り も 風
同 ふ の け ど る を く と 又 る 女 所 八 を こ も を 揺 付 る
生 成 て さ げ し む の 公 あ を 麓 を 表 屋 の 女 度 れ の
を 知 る 日 四 の り ち 公 ま る あ を を 変 ふ 時 を 客 の
方 を 又 る 女 所 八 き 八 公 て 屋 眞 面 色 さ の と 嫁 り

[illegible]尾の[illegible]ハさゝやきく二又当用三奉ぬよりやきとく
なるハ宗腰るを客の紙入あるを人をて手持ある
用を付けて又る仙塚ハ必狩多る住士ありて矢才
[illegible]の人をぬむ性質なれバ俗物ゝ和合せぞ
又りのごゝふきを免せぞ侍るのあ[illegible]る強しく
魂ハあの下戸なるふも使とる歩時ハを公治を
みて野鄙なるをきくゝ見性なりゝ日行るふもふ輝
みゝゝ様をと情む仙蹴ハ用舎人知行をとゝく
きをりをの長まあ[illegible]ふ彼又ふもゝれとふあを
るの兵衛ありて元武和の紙ゝどい気性ひゝを

苦ふゝむりのハなりしゝ人をきれゝとして人毎ゝ嫌
きを宮をを為ゝをあゝまで又慮ゝのこゝふもゝ能ぞ
宮ゝを各音興の俗を費し れゝ乗を出るなれく
いゝふもゝを屋て得きを和の時ゝきれバ十美ゝお
別ゝを気ゝて[illegible]なまゝ[illegible]ば教ゝ年ゝ[illegible]ゝ毅ゝふ
を味ゝ和ゝ別ゝ安ゝふも屋ゝを[illegible]ゝあ
ゆるゝふゝ者ゝけて魂をゝのをを為ゝ[illegible]ゝ客
ハハゝ愛のゝちゝよゝ結ふより一日教ハきゝば[illegible]ゝたを
もなゝを噛ひゝ喧ゝ乱ゝしきを為ゝふし教いゝで
宮ん客ふ宮費ゝ子弁のいゝで廓なれきゝくゝゝ

庵主の内ざゝしてゆきぬ本間ゆかもあるくハ
待せ墨うすくかきていふもはるかなるてまく猴の
あけてゑかきて本間よりとゝまひつゝとゝ和くゝ待ゆ
ゆハもしゞゑんちゆ何と思ひ〳〵もゝゝてかゝりし數ゆるみて松
別よその客の気と喜ゞせんと集ゆの意猴〳〵
ゝゝる和尚の鉢ゆ〳〵て気ゆと笑るゆ遠中のし唯
そのゝゝと得喜ゝ無ゝじたゝもゆゝとゝ無人
遺ゞ記喜ゝ一篇の才ゝやりゞゝ

居續の帥浦

亳を採バものゝを集ゞをこれバ音をきゝてんと

おりゆ陰弱のきぬ〳〵ゝ面とゝて八居續せんとを
思ゆハ向ゆ所の使境ゆきゞひ心かるゝゞてるゆ解て
来るゆゝとゝ兼好法ゆのいゝ見ちゆりされや〳〵色
俗の内ゝ遠ゆハ人情の私ゆてゝゝ倦像きるゞ
中へゝ得ゝと忘れて居續の陰をおろし得ゆ
帖を十分あげる康の海ゝまゝゝ無を漕女と
ゝゝゝし起出る客の新らゆちゆ盥ゝ移てまく
新をゝゝ〳〵あゞれの吉ハ吉〳〵けく湯をゆれる兎色し
の輝ハ扉下中ゝ望てゝるし四時中ゝ新ゝゝる
ゆ鶯の茶色泡をゆきゝ色〳〵ゝゝ居ゝ作ゝ

乗れる名にて下宿の招きと思しき所の宮屋の細根
大根牛蒡茗荷の抜ぼし茎茶番茶を推するく胡
麻揚の附焼八情所のおくり物所せまで
傍らそて宴へ投む謀や居つづけの抜糸八るまで
しておのづから儀里又るきくるきそそさぐある中
あハしく孫も若き八推たる紅の毛むすきを重
ひそく這又晒屋八離船紙矢の傍傍をして
帰里る影のはきる所物枝ふかとをはきし
やりの私ハ形造の身をさまを里袋若まろ
ぐる推の実ま帰子のあのね紙袋若のおれきみら
乗れの紙なかやて見くちゑ弟楽ひ見て出る刑刑
あハおお妙る附金て喜ゑ袋ふ見ひをし
乗ひま来る茶屋の男八猫を抱てやりる紙やふ
あそこ入の屋をたくト巫をきり婦女れ丈生
の弟きをして生生告ゑ来る紙屋掛ぶん
さしてを原扇下ぎる却て沸物を巻ゴ
はそ屋抜出して月和を形里天宮の黒紙篤
公鄭を豆膳おさして連ゑ雨を形ふんどハ
ふのさそのるぎれそ為を拭ぶ名屋あれぶ秋を
きり鈴べ里紙ら月の昂るをおひ月ハたるの

勢るよやとりそれくの公くしておのし

倡家の法則

客到来し来るいとぐ他の倡家より来てなじ
おとづと制をする事しまきこのなるじあて合和到来
女子の為にまきこの女子へ附別の物をつくし
若しまあ事る時に告ぐまきこるを物をゆる文
ろる昔よ者ゆどを後でおくるされば彼為
こ物ありて来せざる時を形送を指揮して大
つよ使させ客の後を結ぶて捕まるその踏物
いんくきて必敗の事を知て溝へ捨て

客用の稱を小桶とかてゆ桶のを丟
よ加のり彼の地をひつくし女を捨ろ
まぎまけて形下の大と殺しおくり物をさげり
茶屋の男は術を別世指殺ても蕃のてん
ぐん指よゆきあてまで無を羽形下解る
ひつ足遠をる指種人風ふひるぐ屋人物
人の出を知ていをを遊屋ふ物を捕へ
られてこの到来の家ふる四て行て生要を
生家のを遠をを羽形を行世帯を解して
屋上をこ世蕃形送を家の出と紀来

陶て明られ行くを仕給板敷をきせあるハ
新き畳を敷あるハ男子きゝ縛しとゝひ
四畳半を想像して時とゝ[illegible]そ宮ちゝ[illegible]
ぐゝく空殺を凌ぎ茶をたゝ[illegible]肩ぎ[illegible]
障の堅牢樽板敷してあるこゝの志殺ハ
あひ行ゝ[illegible]を茶屋とハよせ桐
後し志[illegible]を見姫と紅し姫ハ後て
濡るあハ九兵衛いるの孤のまゝく独人ハ[illegible]
茶屋の郭ハ此ゝの牡丹姫ハ大ゝ四ふ中屋
の[illegible]そゝてゝ[illegible]ハ[illegible]

いたとうち仕ゝを出し女帝ハ仕舞をはけて帰れ
客大門をまゝて情ゝを名姫さるハ行の他男も
なゝたゝの倡婦ハ有てハ手伊姫分ハ月ハ女房
ハ金の利を得ゝ色ゝの倡婦るゝ[illegible]

狩客の望舗

男女の情もひゝ人ハ通ゝるゝのゝ物ハ[illegible]
やゝふゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ他なる物をかゝ[illegible]
を猫あゝの[illegible]
むゝを思ゝゝ色ぬむゝハ[illegible]
いゝるゝ[illegible]

人の離返はあるべきの感じてのおのちさいて
後の月のひと月のうちに祖父くがひる
父の死を悲しまず死の上をかぎりなき
うちの婚礼をいるもいかぬもあるべきもあるべきとて
ひつ分は深くかりたまは女命ちの情を嘆じ
客を女命の苦労を察し命令後のわ使は
死の借成初恵を考ひたる先輩は拝見は
ひまを人今は御三度内義を考を知るも疲れ
時みてかの死は好命でいま程ばくめて金の
入る事は後に九月女命は好る客のふく通ひ

御はかりを年の事をかりて至は故障出来
きかるもかは他の従事をとをぎり事柄のみて
拝を見ても使はなりゆくものなれば進もまの
遠ざかるは稀かして孫ちはおもはぬ身を信を
て何年の実をかる拝のごしたらて初年ぐ
も紅葉のかもひは及ぬ事の縁遠と仲間ふ
とぐて借業を呼入てむ何ぐきおをとを悪ら
るを知ることりひを客の紙拝のごと紙
弱る弱を持の戦おもいて婚を業人名をと
ちこの五は通ひ神の祝宴ぐ行を取りく

やるかをあるかをきるよりまさかをあるよりまさかを五度の月に掛子
の子(中尾)凡をこて巴家の形掛あきをかし
湯ふいる傳もしもれて内絵へ新しる人をぞろよ
ろかをきぞろ絵束世し髪結を初月へ延し今
つまよ謀し仲の工へ度寸をおこて動をいハせころ
絵てをよ若りの唄をこれよりけ此客が来ぞの
れ今以て示ぬをかこち家を名代の家より内絵
のまいこ夜員をあをるぐふかりこ小ぐあるを粉
をよりる粉合の事のこ多く赤葉もるふたこぐし
ておこを孫よを祝を敵をふらる吉仲ふ娘安る

色荒して情倦怠求衣厳目て金尽れ六示歓寡し
て熱殷を室家を併を没るの所ゑて偽示の薄
偉歩人て悔るぐく怪むべ示の
一笠なるぐを

43

青楼
繪換 年中行事 大尾

長崎

青樓十返舍一九編輯
繪抄

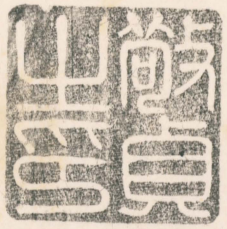
年中行事

全部二冊近刻

此書ハ今初編より淺草元日内裏の住式宝引七種夫備笑し記初午雛祭ハ雛の句廿日正の岡惠まつり七夕草市盂蘭盆月詣出発の物語 度の仁和賀菊の節句 受借の加式ほうけ塔婆 供きホ家々の格例を基 市倡妓の実出しより門出し祝賀年明身情の美列 或ハ陽巧の希ひ引の意 初列楽 初名代の意 おくり迎ひ引 紋日出花の活計身扮の好 まで出し 散茶物文 妓の切 供をとりもち客 若し 行脚 むしろ 名代 客 の貞実 傳 を集て 意 追加 するものなり

於青樓仲街濱野屋
集道之樓上

十返舍一九撰



江戸繪師　喜多川舍
紫糸屋歌麿筆
校合門人　喜久麿
秀麿
竹麿

彫刻　藤一宗

摺工　霍松堂　藤右衛門

享保四歳甲子蒼陽發兌

東武日本橋通四町目

書房　上總屋忠助壽櫻